

## 史 談

2011 (H23) 12・20

## ■ 歴史講演会、開かれる

去る11月19日、あいにくの天気でしたが十王の称名寺で村山民俗学会会長の野口一雄氏をお招きしての歴史講演会が開かれました。県内には郷目貞繁の描いた絵が数多く残されており、スライドで写し出された絵を見ながら話を伺いました。

貞繁が描いたものは昆虫や小動物が多く、生きるものへの愛情が感じられるなど、長時間にわたってお話をさせていただきました。



また、会場を提供していただいた称名寺に残されている京都からの荷札や不動明王の軸、本堂の仏像などを拝観させてもらうことができ、有意義な時間でした。

## ■ 鳥はスズメか、否か

この歴史講演会の折、講師の野口氏が自らの家に伝わっている郷目貞繁が描いたとされる「竹に雀」の軸を持参して参会者に見せてくれた。

一方、以前から会場の称名寺には「竹に雀」の軸が飾られている。今回、その二つをみると称名寺に伝わってきた軸に描かれた鳥はその姿、形からして真にスズメか、という疑問が湧いてきた。それは会員の守谷さんも思ったという。そこで機会を改めて検証することにして、この日は散会した。

後日、家にある鳥類図鑑やネットでスズメの画像をさがして比較を試みるが、もうひとつははっきりしない。称名寺の軸に描かれた鳥がスズメか否か、という疑問

の中味はこうである。掛け軸の絵からは、

- 1 頭の形が丸く、高い
- 2 くちばしが細く、長い
- 3 体全体が大きく、尾羽が下がっている

ように見えることである。形はむしろ「ヒヨドリ」や「カケス」といった鳥の方に似ているのではあるまいか。画題としてはどうか、という別の疑いも生じるが、それはそれとしてももう少し探索を試みるつもりだが、会員諸氏のご意見を伺いたいと思う。

## ■ 自家発電

3

私が子どもで物ごころついた頃にはすでに家に電気はきていたが、父は電気の明るさのことを「燭」といっていた。それは今もってピンとこない値で、一燭はおおよそローソク一本の明るさというのだが、何ワットぐらいになるのだろうか。今のワットとはまったく別の単位なのでわかりにくい。また意外なことだが、このあたりに電気がきた当時の様子もあまり伝わっていない。個人の契約には制限もあり、高くつくものであっただけに、一般家庭では二十ワットの電球が数個つけられる程度だったと聞く。

単に個人だけでなく、たとえばこの地域の製材や製糸業などでも水力から電気による動力の構造転換があったはずだが、その中味はほとんど明らかではない。水力による自家発電は、たとえわずかであれ意外と容易ではない。大きい容量を得られないし、電圧も安定しないだろうから、わずかな電灯だけであっただろう。大容量の電気が自由に、しかも安く得られるようになるのは、つい最近とっていいのである。

私たちの年代でも、電気の契約が五アンペアから十アンペアになった記憶があるぐらいである。その頃はひんぱんにブレーカーが落ち、屋内の配線が細いと火災の原因にもなるというのが、契約を変更する理由でもあった。ブレーカーの前は「安全器」で、電気を使いすぎるとヒューズが溶けて切れるのだが、何度も起きると容量以上の太いものをつけたり、中には針金などを付けたりしたと聞いたことがあるからボヤ騒ぎもあったわけである。

それが今は三十とか、五十アンペアという時代であ

る。それだけ家庭の中にテレビ、洗濯機、冷蔵庫、掃除機、扇風機、電気コタツなど、つぎつぎと電化製品が入ってきて、しかも機器の大型化に伴い、家庭の電気の消費量も急速に増大したのである。また、それを暮らしの豊かさの象徴として追い求めてきたのであるが、一方では人間の欲望を無限のものとして刺激し、その結果、人はより便利なところへ、より明るくて暮らしやすいところへ移動し、大都市が形成されたともいえる。

ただこれも今になってみると、個人が選択した欲求というよりも、どこかで作り出された欲求に、知らず知らずのうちに乗せられたのではなかったかという思いがよぎる。と同時に、電気は自分が使った分だけ金を払えばいつでも無限に送られてくるという錯覚を、いつの間にか持ってしまうような気がしてならない。しかし、これからはそうはいくまい。(川)

## ■ マムシ・その後

何年ほど前になるか、山の下刈りで捕まえたマムシを焼酎につけ、そのままにしていた。本来は二年ぐらいで始末すれば薬効もあるらしいが、捨てるのも惜しい気がして、時々ビンを紙袋から出して見る程度で小屋の片隅に放置していたのである。

この夏、思い立ってビンから出すことにした。マムシはビンの中で苦しんだままの形で恨めしそうに目を開き、たっぷりと焼酎を吸ってふくれていた。マムシの入っている焼酎をガーゼでこし、中のマムシを出して天日にあて、四、五日乾燥させた。焼酎はさして汚れてもいなかったが、とにかく臭くて鼻をつままないでは、一口も飲めない。ご本尊のマムシは日ごとにやせて、煮干のようにカラカラになって小さくなった。そこで頭と尻尾を切り落としたり、へびという感じではなくなった。

臭いはきついが砕いて粉にでもすれば、舐めることはできそうだ。「良薬は口に苦し」というから、そこは菓子類などと異なるだろう。

昔、父に紙に包まれた木の根のようなものを削ってなめさせられたことを思い出した。後で聞けばへびだったらしい。「瘡の虫に効く」のだとか言っていたが、今もって治らないところをみると、薬効も定かで

はないようだ。今のように医者にかかることができない時代の民間療法か、ただの気休めだったのか。



もっとも今でも漢方や健康食品の中には、決まってマムシ、それも養殖されたものが入っているというから、まんざらでもないのかも知れない。人に聞けば、なによりもまずは「効く」と信じなければ・・・との話だが、それでは「鯛の頭も信心から」と変らないだろう。もっとも医者が薬だとしてブドウ糖を出せば、それなりに「効く」というから、やはり「病は気から」ということになるのだろうか。(山)

## ■ 体調不良

体調がおかしいのは国の情勢などとはいわぬまでも、なんとも不可解なことが多いせいではあるまいか。私の牌寺には常には誰も住んでいないから「無住」といったら、常には別のところ住んでいる住職が、「無住」ではないという。加えて、いわば空き家同然の寺を檀家の人たちが金を出し合い、屋根・トイレの大修理だという。その額、家の仏の戒名によって差をつけ、我が家の場合、年に一万四千円を四年間だとか。これをありがたいというべきか。檀家をやめるという方法があるのか、聞いてみたいと思っている。南無阿彌陀仏。

又、これから作るという『白鷹町史』の執筆者に私の名前が上がっていたのだから、これもまたびっくりした話。聞けば会議の原案だとはいうのだが、それどころかすでに章立てや分野別の執筆担当者もほぼ決まっているという話もある。何が何して何とやら……。世間には思わぬ大金を手にしておかしくなった話もある。『芝浜』のように賢い女房がいればともかくも、どこからか急に金が降ってくるのも困りもので、そのためにいい大人が右往左往しているのだから、どこかおかしい。ともあれ寒波襲来で、冬本番です。よいお年を。(丸川)